

ふるさとへの誇り ① 「昔ばなし」

市内には名所、旧跡などの文化財をはじめ、時代の先達者として語り継がれている人、さらに民話や伝説、昔ばなしなど数多くあります。それらを「ふるさとの誇り」として紹介していきます。

今月は、旧甲西町の文化協会が、平成7年12月に発行した冊子、「甲西町の今むかし」から、今でも地元に残る民話です。

ゴザ売りときつね

湯沢の前田に深田という底なし泥田が数枚あつて、田に入るには、丸木か板橋をわたして入らねばなりません。こんな泥田ですから蘭草いんそうづくりに適し、男たちの仕事にしてみました。この蘭草を織るのは女の仕事。織りあげたゴザは、農閑期になると男たちが国中くになかや河内かわうち方面まで売り歩いたものです。蘭草は落合の西沼でもたくさん作られ、それも湯沢で加工したと言われます。

ある年の暮れ、徳さんというゴザ

売りが、背負子しよこに香りのいい新ゴザを山のようにくりつけ、国中へ売りにいった時のことです。正月も近いせいか、徳さんのゴザはよく売れたのですが、最後の一枚が売れたのは、日もとつぷり暮れかかったころでした。

徳さんはいつものように小笠原の宿へ来ると、なじみの居酒屋へよつて、「今晚は、おつかあ、いっぺえくれや」と声をかけると、奥の方から聞きなれた声、

「はいよ、いつものうかい」
てなれた手つきで、五郎八茶わんに

にみなみと酒をつぎ、つまみと山盛りの飯が用意されました。徳さんは、顔いっぱい笑みを浮かべながら、ぐいぐい酒を飲みほし、もういっぱいとかさねました。

「えらいきげんじゃん。商売あつたね」

とおかみにおだてられると、徳さんは、

「うちへ帰ると、おつかあがいい顔するでな、ほうだ、いつものように油揚を五めえくるんでくりような。は

いよ、かんじよう。つりやあいよ」

からの背負子の頭へ、油揚の包みをくりつけ、鼻唄まじりで市道を湯沢へ。ほろ酔い気分で庚申塚こうしんづかに手を合わせ、下湯沢の北川へさしかかりました。穴田の土手を見ると、提灯がついたり消えたりしながら、思湯沢の方からさらに「前山の方まで続いて行くではありませんか。徳さんがじつと見とれていると、なんと、美しい花嫁さんが手招きして徳さんと呼んでいます。いつしか徳さんはそちらに向かつて歩きだしました。長い長い行列が続きます。歩いてても歩いてても、花嫁さんに近づくことはできません。

夜の白みかかったころ、川上村の方からやってきた薪取りの人たちは、川の中を行ったり来たりしている徳さんを見てびっくり。この寒い朝というのに。

「おい徳さん、なにようしてるだあ」
徳さんは「深いぞ、浅いぞ、まだかまだか」

といつては、東へ西へ行ったり来た

り。川上の人たちは、びつしよりになつた徳さんを引きあげて、家へつれていきました。油揚はかみちぎられてあとかたもありません。やがて、おかみさんの顔を見るとどうやら気がつき、ゆうべあつたことを話すと、「狐にやられたな」とみんなで大笑い。それから徳さんは、途中の居酒屋の酒はつつしんで、早く家に帰るようになったということです。

